

序. シンポジウム企画にあたって: 栄養と口腔保健との新たな協働を考える

首都大学東京 人間健康科学研究科

稲山 貴代

「歯及び口腔の健康を保つことは、単に食物を咀嚼するという点からだけでなく、食事や会話を楽しむなど、豊かな人生を送るための基礎となるものである」(健康日本 21 公式 HP より)

生涯にわたり「お口の健康」が重要であることは、口腔保健分野のみならず食育、健康増進、高齢者の自立維持等々、誰もが認識している。栄養教育が最終的に目指す生活の質(QOL)を考えても、子どもの「おいしく食べる」「楽しく食べる」から、高齢期の「食べる楽しみを援助する」に至るまで、それぞれのライフステージにおいて、食べることの意味と課題が多面的に考えられている。次は、地域/コミュニティにおける有機的なつながりをもった実践活動とその成果の集積であろう。では、その「つながり」って何? 連携、連携と誰もが口にするけれど、「連携」って何?

本シンポジウムは、学会長の星 且二先生の「かかりつけ歯科医のいる人は健康長寿」の話を伺ったときに、真っ先に矢澤正人先生の顔を思い浮かべて企画したものである。矢澤先生は多摩立川保健所在任時、「北多摩西部保健医療圏における摂食・嚥下機能支援事業」をスタートさせた立役者である。「点から線へ、そして面へ展開する地域戦略」と、しばしば口にされておられた。シンポジウムの中心人物として、うってつけではないか!

その矢澤先生に①行政の立場から、地域での連携システムについてお話をいただく。その後、②脇本景子先生(栄養教諭)から学童期、③武井典子先生(歯科衛生士)から成人期、④戸原玄先生(歯科医師)から高齢期について、ご自身の取り組みをお話しいただくようお願いをしている。それぞれのお立場からのご発言に、「つながり」や「新たな協働」の種がたくさんつまっているはずである。

多くの実践の場において、一人一人の活動は、その視線の先として線や面への展開があったとしても、それぞれの立場、その時点での「点」の活動である。目の前の人や人々の顔をみつめながらの具体的な実践活動と「つながりや連携が重要である」という概念を結びつけ、具現化していくためには、そこに何らかの仕掛け(システム)が必要である。本シンポジウムの総括は、やはり矢澤先生に依頼した。どのようにシンポジストの話をつなげていただけるのか、大いに楽しみである。本シンポジウムが、身近な口腔保健活動から、ライフステージのつながり、地域への展開、健康的なコミュニティづくりへと視点をひろげる一助になると幸いである。